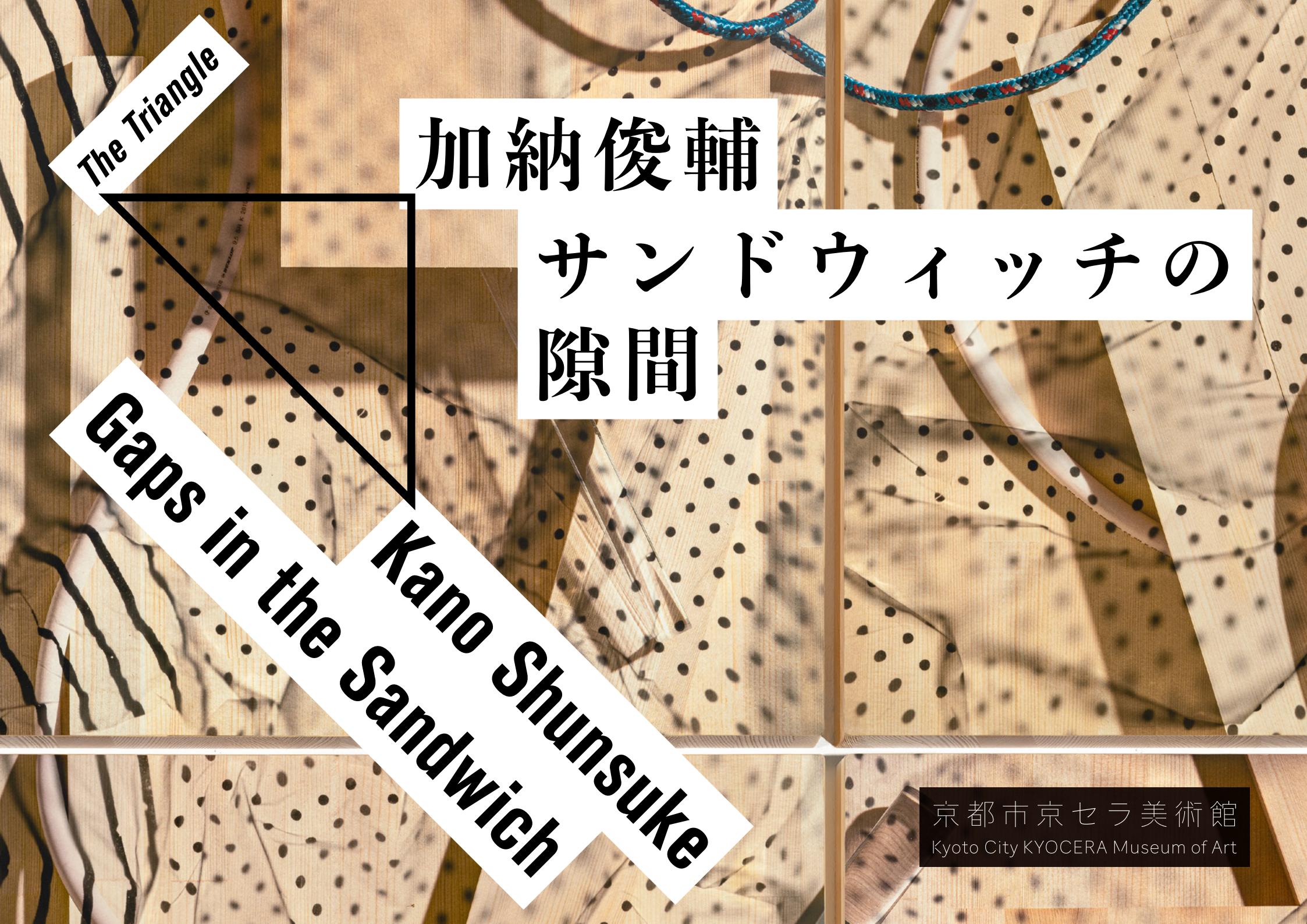


The Triangle

加納俊輔
サンドウィッチの隙間

Kano Shunsuke
Gaps in the Sandwich

京都市京セラ美術館
Kyoto City KYOCERA Museum of Art

加納俊輔：サンドウィッチの隙間

2021年10月26日（火）– 2022年1月23日（日）

京都市京セラ美術館 ザ・トライアングル

主催：京都市

令和3年度文化資源活用推進事業

Kano Shunsuke: Gaps in the Sandwich

October 26, 2021 – January 23, 2022

The Triangle, Kyoto City KYOCERA Museum of Art

Organizer: City of Kyoto

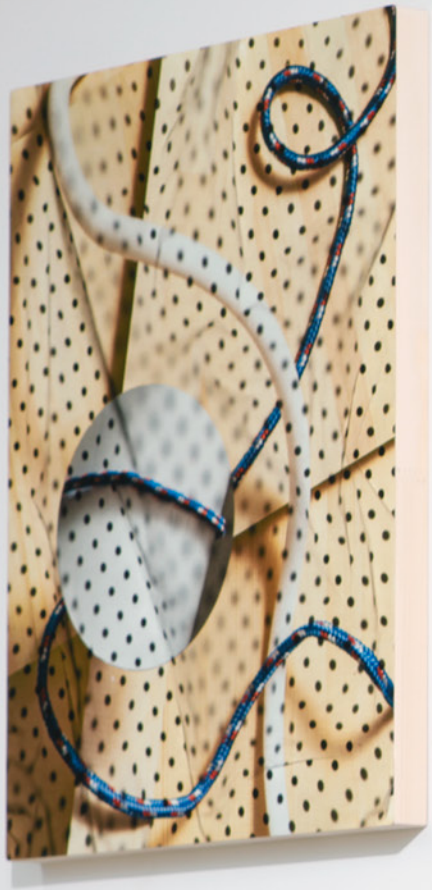
「ザ・トライアングル」について

「ザ・トライアングル」は当館のリニューアルオープンに際して新設された展示スペースです。京都ゆかりの作家を中心に新進作家を育み、当館を訪れる方々が気軽に現代美術に触れる場となることをねらいとしています。ここでは「作家・美術館・鑑賞者」を三角形（トライアングル）で結び、つながりを深められるよう、スペース名「ザ・トライアングル」を冠した企画展シリーズを開催し、京都から新しい表現を発信していきます。

The Triangle

The Triangle is a space newly created for the reopening of the Kyoto City KYOCERA Museum of Art. It aims to nurture emerging artists, especially those associated with Kyoto, and to provide opportunities for museum visitors to experience contemporary art. In order to connect the artist, museum, and viewer in a triangle and deepen those connections, the space hosts an eponymous series of special exhibitions and presents new artistic expression from Kyoto.

P
24H



The Triangle
加納俊輔
サンドウィッチの隙間
2021年10月26日㈫ – 2022年1月23日㈰
October 26, 2021 – January 23, 2022
Kano Shunsuke
Gaps in the Sandwich

「サンドウィッチの隙間」に何が見えるか

野崎昌弘

Fig. 1《layer of my labor_40 (PP band on lumber)》2012年

Fig. 2《layer of my labor_122 (drawing, putty on stone)》2021年
Photo: Koroda Takeru

加納俊輔は主にデジタル写真を用いて作品を制作している。写真プリントのみならず、立体、映像、布地への転写などメディアや形態は多岐にわたる。加納は写真、印刷、版など世界を写し取る複製技術を用いながら、人の知覚の過程に潜み、間欠的に露わになる“見る”ことの頼りなさを可視化する。作家は、“見る”ことにまつわる感覚的な反応の不確かさについて、鑑賞者とともに楽しんできた、とも言えよう。

本展「サンドウィッチの隙間」では加納の作品の中から、近年、彼が特に追求している「Pink Shadow」シリーズ[1]、およびスケッチのように日々制作している「圧縮トレーニング」シリーズ[2]の新作を中心に展示構成をした。この小論では作家の取り組みを主に写真の側面から素描してみたい。

写真、立体、映像、コラージュ

加納の作品は、レイヤーとその圧縮、コラージュとフレーミング[3]といった現代写真にとって原理的に重要な要素を集中的に抽出して扱い、ありふれた風景や事物のあり様を異化する。それによりレイヤーの階層構造は不安定になり、鑑賞者（主体）と対象物（客体）との関係は揺らぎはじめる。そして、“見る”ことにまつわる重層的な非決定の状態が人の知覚を宙吊りにし、幻惑させる。

スナップ写真「specious notion」シリーズ（2011年－）や《snap_P (Housing Complex)》（2021年）では、ありふれた風景の中にある対象物の配置や造形にユニークな構図を見出し、カメラのフレーミングによって、安定したコンポジションを脱臼させるような風景を切り取って見せる。

立体作品のシリーズ「layer of my labor」（2011年－）（Fig. 1、2）[4]では木や石など立体的なものを素材に、実物の複写によって、実物とその写真という構造を明確に意識し、より操作的な介入を行うようになっていった。本展出品作の大理石の表面にその大理石の写真を貼った作品では、大理石の表面にパテを載せて撮影した写真のプリントに、マジックインキでドローイングして再度撮影しプリントするといった工程を繰り返した写真が用いられている。レイヤーとその

Fig. 3《圧縮トレーニング_DSC5438》
2021年

圧縮がタイトルにもある“労働（labor）”の時間を想起させる。

また、映像作品「Cool Breeze on the Rocks」シリーズ（2015年–）[5]は、動く電車の車窓にスナップ写真のイメージの出力を貼り、固定カメラで写真イメージと背景となる車窓の風景が電車のスピードで移り変わっていく様子を収めた映像の作品である。車窓というフレーミングされた風景とその中央にある矩形にフレーミングされたイメージは全く無関係に、動く地と不動の図という関係性をもつことになる。

一方、コラージュでは、本展のための新作《圧縮トレーニング_2021》（2021年）がある。出展作の一つ（Fig. 3）では、基底部をなすモノクロの写真（砂浜の背景に人物が立っている）の上に、不定形に切り取られた金網越しの自動車のボディのようなカラーの鏡面の写真が貼られている。右上には丸く切り取られたモノクロの砂地の写真が地となるモノクロ写真の上に貼られているところもあり、ここでレイヤーは強調される。一方この丸さと切り貼りされたカラー写真の輪郭の丸さが呼応して、レイヤーの図と地の関係が定かではなくなる。

加納のコラージュは、写真作品と同様に物語的な意味構成に従属したものではなく、素材と色の感覚的な遊びとして、原理的には無限に積み上げることができる図と地の関係の更新、レイヤー積層の運動としてある。

「Pink Shadow」について

「Pink Shadow」シリーズは、作家が現在、最も注力している仕事である。大学で版画を専攻していた加納は、1960年代以降旺盛な活動で時代を画した現代版画家の井田照一[6]の仕事を参照項として、プリントの表裏やその間を意識していた。

本シリーズは、まず、木材パネルにヒモやオブジェを置いて撮影し、それを印画紙にプリントする。そして、透明フィルムにシルクスクリーンでストライプや水玉のモノトーンのイメージをプリントしたものを用意し、印画紙の裏側にその透明フィルムを重ね合わせ、裏側から照明を当てて正面から再度撮影する。そうすると印画紙に映りこんだ透明フィルムのイメージが表面から視認できる。完成したプリントには重ね合わせたイメージの前後が逆になって2枚目のモノトーンのイメージが最も上層に現れるのだ。本来のプリント表面は対象物の物理的な積み重ねを写し取り、

圧縮されたレイヤーとして基底の層となり、その上に新たなレイヤーとしてモノトーンのイメージが現れるが、もはやそれが、どこの隙間に潜り込んだレイヤーなのかは定かではなくなる。

さらにこのプリントを元の木材パネルに圧着マウントすることで、物質的な存在感をもつ木材の表面に圧縮された不可知のレイヤーが現れ、目の前にあるイメージの表層と奥行きについて認識が揺れ続けるような感覚をもたらしている。

単純なレイヤーの積層ではなく、「フラットな表面の奥にあるモワッとした感触」[7]に触れたいという作家の欲望によって、作品は大きく質的な転換をなしたと言える。そして、今回の展覧会は、本来であればパンとパンの間に具材がギュっと詰まっている「サンドウィッチ」に、無いはずの「隙間」を垣間見ようとするような試みだった、ということができる。

結び

現代の写真は、写真が擬似的に獲得した近代的な自己規定――世界の真実を写す――を突きくずしながら、再び写真とは何かという問いに向かって思考と実践を紡いでいる。

加納の写真に対する取り組みの姿勢も、こうした現代写真の問いに対する思考と実践であり、それは、さかのぼると生まれ育った大阪の郊外の巨大団地の風景から受けた影響もあったであろう。かつて団地の大規模修繕で工事用の仮囲いで棟が覆われたとき、同じ団地に住む友人の部屋からの眺めが、普段は具体的に異なるのに、足場が組まれ透過性のある囲いに覆われ、その隙間から遠景が見えたとき、自分の部屋からの風景と同じように見えたという[8]。作家が見たのは正確には、相似する構造だったと言ってよいであろう。どこにでもある風景、見ること、細部と構造、相似形と違和感の認知など、加納のものの見方の根底には大阪の都市郊外の風景があったのかもしれない。

加納俊輔はデジタル写真をとおして、どこまでも真実「らしさ」しかない写真プリントの表面にとどまりながら、一見すると労多くして有用な価値を生み出すわけではない行為と時間を惜しむことなく、“見る”ことによる世界の開示とそのゆらぎを追求していく。客観描写でも物語の説明や追憶の喚起でもなく、フレーミングとコラージュ、そしてレイヤーとその圧縮による、緻密で構築的ではあるが非意味的な表層だけ

が汪溢するイメージによって、“見る”ことにまつわる信憑と懐疑をもう一度問いかけている。

（のざき・まさひろ／京都市京セラ美術館キュレーター）

1 「Pink Shadow」シリーズは2018年より開始された。本展では新作の《Pink Shadow_43–72》（pp. 8–10）、《Pink Shadow_73–74》（p. 11）などを展示。
2 「圧縮トレーニング」は、本来発表を目的とせずに、雑誌や写真の切り抜きをA 4 サイズほどの透明のシートにラミネートした日々のスケッチのような行為であり作品シリーズの名称。本展では高さ 3 メートル弱のガラス面に合わせて布に拡大プリントした新作《圧縮トレーニング_2021》（pp. 4, 5, 16）を発表。
3 例えば、清水穣は「コラージュ、レイヤー、フレーム、イクイヴァレント」は「現代のデジタル写真の重要な参照点である」と述べている。（清水穣『デジタル写真論 イメージの本性』東京大学出版会、2020年、27頁）
4 本展では大理石の新作《layer of my labor_120–123》（pp. 13, 14）を展示した。
5 本展では《Cool Breeze on the Rocks_03 (Tango)》（p. 6）を展示した。
6 井田照一（1941–2006）は日本の現代版画に大きな足跡を残した版画家。加納は井田の「Lotus Sutra」と名付けられたシリーズの、薄い紙の表と裏にシルクスクリーンプリントを施した作品に影響を受けたという。
7 作家談（2021年7月のインタビューにて）。
8 同上。

What Can We See in the Gaps in the Sandwich?

Nozaki Masahiro

Curator, Kyoto City KYOCERA Museum of Art

Fig. 1 *layer of my labor_40 (PP band on lumber)* (2012)

Fig. 2 *layer of my labor_122 (drawing, putty on stone)* (2021).
Photo: Koroda Takeru

Kano Shusuke works mainly with digital photography. His practice involves an array of mediums and forms, not only photographic prints but also sculpture, moving image, and fabric printing. He employs the likes of photography, offset printing, and other kinds of printing—technologies that copy and reproduce the world—to make visible the unreliability of "seeing" that lurks within the process of human sight and is intermittently revealed. We might say that the artist has had fun with viewers regarding the uncertainty of sensuous responses related to "seeing."

This exhibition, *Gaps in the Sandwich*, centered on new works from *Pink Shadow*,[1] the series pivotal to his recent practice, and *compression training*,[2] a series that Kano has created like daily sketches. In this short essay, I would like to give a general outline of his practice with a focus on photography.

Photography, Sculpture, Moving Image, Collage

Kano's work intensively extracts and deals with layering and its compression, with collage and framing[3] —the principle elements of significance for contemporary photography—and then defamiliarizes the conditions of commonplace landscapes and things. By so doing, the hierarchical structure of the layers is destabilized, and the relationship between the viewer (subject) and viewed (object) begins to unravel. And the multilayered, nondeterministic state surrounding the act of seeing then leaves the human sense of sight in limbo and mesmerized.

In the snapshot-photography series *specious notion* (2011–) and *snap_P (Housing Complex)* (2021), Kano detects unique compositions in the shapes and arrangement of objects within ordinary landscapes, and then extracts and shows landscapes that seemingly dislocate fixed compositions through the framing of the camera.

In the sculpture series *layer of my labor* (2011–) (Figs. 1, 2),[4] Kano takes three-dimensional materials like wood and stone, and duplicates an actual object in a way that emphasizes the structure of the object and its photograph, and then manipulatively intervenes. Featuring a photograph of marble affixed to the surface

Fig. 3 *compression training_DSC5438* (2021)

of the very marble in the photograph, the exhibited work made use of photographs by repeating a process of adding putty to the marble, drawing on the photographic print of the marble with paint marker, rephotographing it, and printing the photograph. This layering and compression evokes the time involved in the titular labor.

In the *Cool Breeze on the Rocks* (2015–) series of video works,[5] Kano pastes the image output that is a snapshot photograph onto the window of a moving train, and then uses a fixed camera to capture how the image of the photograph and the landscape in the window that forms the background to the snapshot change according to the speed of the train. The landscape framed in the window and the image in the middle of the window that was framed as a rectangle are completely unrelated, yet come to take on a relationship of moving ground and motionless figure.

Kano's collages, on the other hand, include a new work created for this exhibition, *compression training_2021* (2021). In one of pieces in the installation (Fig. 3), irregularly shaped cutouts from a photograph of a colored mirror resembling the body of a car seen through a wire fence are pasted on top of a monochrome photograph (in which figures stand against a sand-beach backdrop) that forms the base. In the top right, round cutouts from the monochrome photograph of the sand are laid over the monochrome photograph (the ground), emphasizing the layers. Their rotundity corresponds to that of the outlines of the color-photograph cutouts, making the figure-ground perceptual layering uncertain.

Like his photographic works, Kano's collages are not subordinate to narratological semantic structures, but rather play sensuously with material and color, update the figure-ground relationship that can, in principle, be stacked infinitely, and shift the buildup of layers.

Pink Shadow

The *Pink Shadow* series is the project with which the artist is currently most engaged. Having majored in printmaking at university, Kano references the work of contemporary print artist Ida Shoichi,[6] whose pioneering post-1960s practice ushered in a new era for the medium, in his awareness of both the front and back of a print, and what lies in between.

In this series, photographs are taken of cords and objects placed on a wooden panel, which are then printed on photographic paper. Monotone images of stripes and polka dots are silkscreened onto transparent film, with which the back of the photographic paper is

overlaid; this is all lit from behind and rephotographed from the front. Doing so enables the viewer to perceive, on the surface, the images on the transparent film now reflected in the photographic paper. In the completed print, the overlaid images reverse and the monotone image underneath appears as the topmost layer. The original printed surface copies the physical buildup of the object, and forms a laminate base as a compressed layer, over which the monotone images appear as a new layer, making it uncertain which layer concealed in which gap it is.

Moreover, by then pressure-mounting this print onto the original wooden panel, there appears an otherwise unknowable, markedly physical layer compressed into the surface of the wood, effecting a continuously fluctuating sense of perception in the viewer regarding the surface and depth of the images in front of them.

Through his self-professed desire to reach not a simple buildup of layers, but rather "the muggy feeling that lies at the back of a flat surface,"[7] his works have accomplished an immense qualitative shift. This exhibition can be seen as an attempt to glimpse the gaps that shouldn't be there in a "sandwich" that, ordinarily, is tightly packed with filling between slices of bread.

Conclusion

Contemporary photography breaks down the modern self-definition that the photograph artificially achieved—that is, a reproduction of the true reality of the world—while weaving ideas and practices that once again confront the nature of the photograph.

Kano's stance when engaging with photography is a thinking and practice that derives from such questions of contemporary photography, but which we can perhaps trace back to the influence of the landscape amid which he was born and grew up, that of a giant public housing complex in the suburbs of Osaka. The buildings were once covered in temporary fencing for renovations and the view from the apartment of a friend living in the same complex that was ordinarily quite different seemed, now covered by scaffolding and permeable fencing with the vista in the background visible through the gaps, to show the exact same landscape as could be seen from his own apartment.[8] What the artist saw was, to be accurate, surely what we should call structural similarity. Everyday landscapes, the act of seeing, details and structure, the recognition of incompatibility and similar shapes: underlying Kano's way of seeing things is perhaps that landscape of the Osaka suburbs.

By means of digital photography, Kano Shunsuke

remains on the surface of the photographic print with its purely total "truthfulness" while spending an immense amount of time and effort doing things that seemingly require great effort but produce nothing of useful value in order to seek out the disclosure of the world, and its disruption, through the act of seeing. By means of images with a surfeit of only outer layers that are meticulous and structural, yet ultimately meaningless, made by framing and collage, and then layering and the compression of those layers, instead of objective portrayal or of narratological explanation or spurred reminiscence, he is re-questioning the credence and doubt related to seeing.

1 Kano began the *Pink Shadow* series in 2018. This exhibition included *Pink Shadow_43–72* (pp. 8–10), *Pink Shadow_73–74* (p. 11), and other works from the series.

2 The name refers to both the series and the act akin to making daily sketches in which the artist laminates cutouts of magazines and photographs onto A4-sized transparent sheets without the express purpose of exhibiting them. This exhibition featured a new work, *compression training_2021* (pp. 4, 5, 16), enlarged and printed on fabric to fit a glass surface almost three meters tall.

3 Shimizu Minoru, for instance, describes collages, layering, framing, and Alfred Stieglitz's *Equivalents* as the most important reference points for contemporary digital photography. Shimizu Minoru, *On Digital Photography: Non-Identity of the Image*, Tokyo: University of Tokyo Press, 2020, p. 27.

4 The exhibition included the new marble work *layer of my labor_120–123* (pp. 13, 14).

5 The exhibition included *Cool Breeze on the Rocks_03 (Tango)* (p. 6).

6 Ida Shoichi (1941–2006) was a print artist who made a significant mark on contemporary printmaking in Japan. Kano has credited the influence of Ida's *Lotus Sutra* series of works silkscreened on the front and back of thin paper.

7 Interview with the artist (July 2021).

8 Ibid.

作品リスト

①《Pink Shadow_43–72》
2021年 | インクジェットプリント、木材
30点組　各65 × 52 × 2.5 cm

②《Pink Shadow_23》
2020年 | インクジェットプリント、木材
113.5 × 91 × 1.8 cm

③《Pink Shadow_73》
2021年 | インクジェットプリント、木材
50 × 40 × 2.5 cm

④《Pink Shadow_74》
2021年 | インクジェットプリント、木材
50 × 40 × 2.5 cm

⑤ シリーズ「snap_P (Housing complex)」より
2021年 | インクジェットプリント
5点　各42.4 × 32.8 cm

⑥《layer of my labor_120 (drawing, patty on stone)》
2021年 | インクジェットプリント、大理石
54.5 × 54 × 2 cm

⑦《layer of my labor_121 (drawing, patty on stone)》
2021年 | インクジェットプリント、大理石
42.7 × 54.1 × 2 cm

⑧《layer of my labor_122 (drawing, patty on stone)》
2021年 | インクジェットプリント、大理石
35.7 × 38 × 2 cm

⑨《layer of my labor_123 (drawing, patty on stone)》
2021年 | インクジェットプリント、大理石
29.8 × 38.8 × 2 cm

⑩《圧縮トレーニング _2021》
2021年 | インクジェットプリント、布地
5点　サイズ可変

⑪《Cool Breeze On The Rocks_03 (Tango)》
2021年 | シングルチャンネルHDビデオ
サイズ可変、27分28秒

List of Works

① *Pink Shadow_43–72*
2021 | Inkjet print, lumber
A set of 30 works 65 × 52 × 2.5 cm each

② *Pink Shadow_23*
2020 | Inkjet print, lumber
113.5 × 91 × 1.8 cm

③ *Pink Shadow_73*
2021 | Inkjet print, lumber
50 × 40 × 2.5 cm

④ *Pink Shadow_74*
2021 | Inkjet print, lumber
50 × 40 × 2.5 cm

⑤ from the series *snap_P (Housing complex)*
2021 | Inkjet print
5 works 42.4 × 32.8 cm each

⑥ *layer of my labor_120 (drawing, patty on stone)*
2021 | Inkjet print, marble
54.5 × 54 × 2 cm

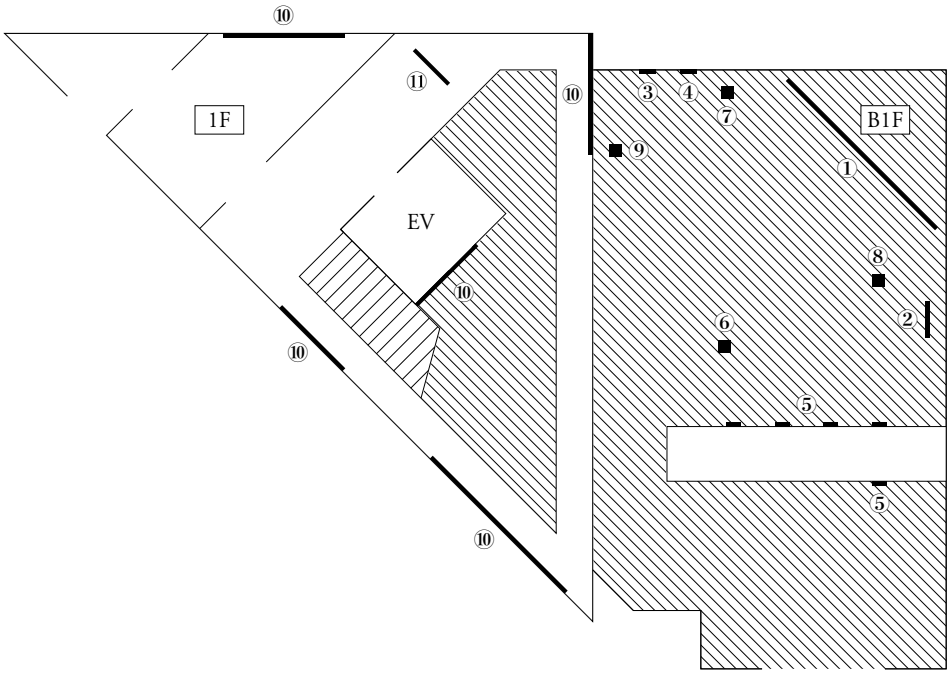
⑦ *layer of my labor_121 (drawing, patty on stone)*
2021 | Inkjet print, marble
42.7 × 54.1 × 2 cm

⑧ *layer of my labor_122 (drawing, patty on stone)*
2021 | Inkjet print, marble
35.7 × 38 × 2 cm

⑨ *layer of my labor_123 (drawing, patty on stone)*
2021 | Inkjet print, marble
29.8 × 38.8 × 2 cm

⑩ *compression training_2021*
2021 | Inkjet print, fabric
5 works Dimention variable

⑪ *Cool Breeze On The Rocks_03 (Tango)*
2021 | Single channel HD video
Dimention variable, 27min.28sec.



加納俊輔　かのう・しゅんすけ

1983　大阪府生まれ
2010　京都嵯峨芸術大学大学院芸術研究科修了
現在　京都在住

主な個展

2011　「ワープトンネル」Gallery PARC（京都）
2013　「バウムクーヘンとペタっとした表面」Maki Fine Arts（東京）
2014　「ファウンテン マウンテン」Maki Fine Arts（東京）
第 8 回 shiseido art egg「加納俊輔｜ジェンガと噴水」shiseido gallery（東京）
2015　「Cool Breeze On The Rocks」Maki Fine Arts（東京）
2016　「コンストラクション断面」Maki Fine Arts（東京）
「Floating Fountain」space_inframince（大阪）
2017　「Riverside Time」MSC ギャラリー同志社女子大学京田辺キャンパス（京都）
2018　「stone age in the woods」RC HOTEL 京都八坂（京都）
「Pink Shadow」Maki Fine Arts（東京）
2019　「Abandoned In Da Streetz」y gion（京都）
2020　「カウンタープログラム」Art-Space TARN（奈良）
2021　「滝と関」Maki Fine Arts（東京）
「圧縮トレーニング」clinic（東京）

主なグループ展

2011　「CANON：写真新世紀 2011 東京展」東京都写真美術館（東京）
「加納俊輔×髙橋耕平『パズルと反芻』“Puzzle & Rumination”」Social Kitchen、LABORATORY、Division（いずれも京都）
2012　「第 15 回 岡本太郎現代芸術賞（TARO 賞）展」川崎市岡本太郎美術館（神奈川）
「SHOWCASE#1 curated by minoru shimizu」eN arts（京都）
「加納俊輔×髙橋耕平『パズルと反芻』“Puzzle & Rumination”」island MEDIUM、NADiff window gallery、実家｜ JIKKA（いずれも東京）
「かげうつし―写映・遷移・伝染―」京都市立芸術大学 ギャラリー @KCUA（京都）
2013　「:No subtitle」HAGIWARA PROJECTS（東京）
2014　「eeny, meeny, miny, moe｜red」eN arts（京都）
「これからの写真」愛知県美術館、名古屋（愛知）
「架設｜この物質はイメージです」京都精華大学 T-101（京都）
「TOKYO 2020 BY JAPANESE PHOTOGRAPHERS #2」YellowKorner Paris Pompidou（パリ）
2015　「早川祐太×高石晃×加納俊輔［三つの体、約百八十兆の細胞］」札幌大通地下ギャラリー 500m 美術館（北海道）
「SHASHIN! Japanese Photography Then/Now」Sotheby’s Hong Kong Gallery（香港）
「藪の中」Galerie Aube（京都）
2016　「PATinKyoto 京都版画トリエンナーレ 2016」京都市美術館（京都）
「AKZIDENZ」青山｜目黒（東京）
2017　「VOCA 展 2017 現代美術の展望―新しい平面の作家たち」上野の森美術館（東京）
2018　「WALKING, JUMPING, SPEAKING, WRITING」SeMA STORAGE（ソウル）*
鉄道芸術祭 vol. 8「超・都市計画 ～そうなろうとする CITY～」アートエリア B1（大阪）*
「音羽川百景」音羽川砂防ダム周辺（京都）
2019　「MOT アニュアル 2019 Echo after Echo：仮の声、新しい影」東京都現代美術館（東京）*
「フライング・ヴンダーカンマー」toberu（京都）
2020　「踊り場と耕作」ホテル アンテルーム 京都 Gallery 9.5（京都）
「音羽川百景 2020」音羽川砂防ダム周辺（京都）
2021　「Kyoto Art for Tomorrow 2021―京都府新鋭選抜展―」京都文化博物館（京都）

＊加納俊輔、迫鉄平、上田良による「複製」をテーマに制作を行うユニット「THE COPY TRAVELERS」として参加

上演作品

2015　「山びこのシーン」京都芸術劇場 春秋座（京都）

受賞歴

2011　CANON：写真新世紀 2011 佳作（清水穣選）
第 15 回 岡本太郎現代芸術賞（TARO 賞）入選
2021　Kyoto Art for Tomorrow 2021―京都府新鋭選抜展― 朝日新聞社賞受賞

Kano Shunsuke

1983 Born in Osaka Prefecture, Japan
2010 Graduated from Master Course at Kyoto Saga University of Arts (MFA)
Currently resides in Kyoto

Selected Solo Exhibitions

2011 *WARP TUNNEL*, Gallery PARC, Kyoto
2013 *Baumkchen and Flat Surfaces*, Maki Fine Arts, Tokyo
2014 *Fountain Mountain*, Maki Fine Arts, Tokyo
Jenga and Fountain, shiseido gallery, Tokyo
2015 *Cool Breeze On The Rocks*, Maki Fine Arts, Tokyo
2016 *Construction Cross Section*, Maki Fine Arts, Tokyo
Floating Fountain, space_inframince, Osaka
2017 *Riverside Time*, MSC Gallery Doshisha Women's College of Liberal Arts, Kyoto
2018 *stone age in the woods*, RC HOTEL KYOTO YASAKA, Kyoto
Pink Shadow, Maki Fine Arts, Tokyo
2019 *Abandoned In Da Streetz*, y gion, Kyoto
2020 *Counter Program*, Art-Space TARN, Nara
2021 *Cascade and Barrier*, Maki Fine Arts, Tokyo
compression training, clinic, Tokyo

Selected Group Exhibitions

2011 *Canon: New Cosmos of Photography/Tokyo*, Tokyo Metropolitan Museum of Photography, Tokyo
Puzzle & Rumination, Social Kitchen, LABORATORY, Division, Kyoto
2012 *The 15th Taro Okamoto Award for Contemporary Art*, Taro Okamoto Museum of Art, Kawasaki, Kanagawa
SHOWCASE#1 curated by minoru shimizu, eN arts, Kyoto
Puzzle & Rumination, island MEDIUM, NADiff window gallery, and JIKKA, Tokyo
KAGEUTSUSHI-Reflection, Transition, Infection, Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA, Kyoto
2013 *:No subtitle*, HAGIWARA PROJECTS, Tokyo
2014 *eeny, meeny, miny, moe | red*, eN arts, Kyoto
Photography Will Be, Aichi Prefectural Museum of Art, Nagoya, Aichi
Kasetsu, Kyoto Seika University T-101, Kyoto
TOKYO 2020 BY JAPANESE PHOTOGRAPHERS #2, YellowKorner Paris Pompidou, Paris
2015 *Three Bodies, About 180 trillion Cells*, Sapporo Odori 500-m Underground Walkway Gallery, Hokkaido
SHASHIN! Japanese Photography Then/Now, Sotheby's Hong Kong Gallery, Hong Kong
Yabunonaka, Galerie Aube, Kyoto
2016 *PATinKyoto*, Kyoto Municipal Museum of Art, Kyoto
AKZIDENZ, AOYAMA | MEGURO, Tokyo
2017 *VOCA 2017*, The Ueno Royal Museum, Tokyo
2018 *WALKING, JUMPING, SPEAKING, WRITING*, SeMA STORAGE, Seoul *
Railway Art Festival vol. 8 "Ultra Urban Planning: The City with a Mind of Its Own," Art area B1, Osaka *
Otowagawa River Landscape, Otowagawa River Sand Control Dam, Kyoto
2019 *MOT Annual 2019 Echo after Echo: Summoned Voices, New Shadows*, Museum of Contemporary Art Tokyo, Tokyo *
FLYING WUNDERKUMER, toberu, Kyoto
2020 *LANDING AND CULTIVATION*, HOTEL ANTEROOM KYOTO GALLERY 9.5, Kyoto
Otowagawa River Landscape 2020, Otowagawa River Sand Control Dam, Kyoto
2021 *Kyoto Art for Tomorrow 2021 – Selected Up-and-coming Artists' Exhibition*, The Museum of Kyoto, Kyoto

* project with Ueda Yaya, Sako Teppei & Kano Shunsuke, as "The Copy Travellers"

Theatrical Performance

2015 *Yamabiko no Scene*, Kyoto Art Theater Shunjuza, Kyoto

Awards

2011 Honorable Mention Award, Canon: New Cosmos of Photography 2011
Selected for the 15th Taro Okamoto Award for Contemporary Art
2021 The Asahi Shimbun Company Award, Kyoto Art for Tomorrow 2021 – Selected Up-and-coming Artists' Exhibition

加納俊輔：サンドウィッチの隙間

［展覧会］
野崎昌弘（京都市京セラ美術館）

［カタログ］
編集：水野良美（京都市京セラ美術館）
翻訳：ウィリアム・アンドリューズ（pp. 21–24）
撮影：来田猛

デザイン：菊地敦己

発行日：2022 年 3 月 3 日

発行者：京都市京セラ美術館
〒 606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町 124
www.kyotocity-kyocera.museum

Kano Shunsuke: Gaps in the Sandwich

［Exhibition］
Nozaki Masahiro (Kyoto City KYOCERA Museum of Art)

［Catalogue］
Edited by: Mizuno Yoshimi (Kyoto City KYOCERA Museum of Art)
Translation: William Andrews (pp. 21–24)
Photography: Koroda Takeru

Designed by: Kikuchi Atsuki

First Edition: March 3, 2022

Published by Kyoto City KYOCERA Museum of Art
124 Okazaki Enshoji-cho, Sakyo-ku, Kyoto 606-8344 Japan
www.kyotocity-kyocera.museum

© Kyoto City KYOCERA Museum of Art 2022